

The Epistemology of the Sixth-Century Yogācāra Scholar Dharmapāla:
A Study of the *Guan suoyuan lun shi* (觀所緣論釋),
Dharmapāla's Commentary on Dignāga's *Observation of Epistemic
Object* (*Ālambanaparīkṣā*),
with an English Translation and Annotations

(六世紀瑜伽行派学僧護法の認識論：『觀所緣論釈』の訳注と研究
－陳那『觀所緣論』(*Ālambanaparīkṣā*) に対する護法の注釈－)

Yong Tsun Nyen

公表用論文要約

1. 研究背景

本論文は、護法 (Dharmapāla, ca. 530–561 C.E.) による漢訳『觀所緣論釈』(以下、*ĀPSH*) を研究し、その英訳および詳細な注釈を提供するとともに、Vinītadeva (ca. 690–750 C.E.) によるチベット語訳『觀所緣論注』(*Ālambanaparīkṣāṭīkā*, 以下、*ĀPT*) と比較することである。護法注釈は、陳那 (Dignāga, ca. 480–540 C.E.) が認識論の基礎を築いた『觀所緣論』(*Ālambanaparīkṣā*, 以下、*ĀP*) に対する注釈書であり、その内容は義浄 (635–713 C.E.) によって中国語に翻訳された。

ĀP は、認識対象 (所緣, *ālambana*) を外界の物体ではなく、認識成立の条件として定義し直した重要テキストである。陳那は、所緣が具備すべき条件として、(1) 認識を生じさせる因であること、(2) その認識の中に相 (形相) として現れることを提示した。この二条件により、外界の原子やその集合体を所緣と見なす實在論を批判し、認識に現れる相を所緣とする唯識認識論の枠組みを示した。

護法注釈は、この枠組みを継承しつつ精緻化し、論敵の主張が所緣二条件を満たさないことを論証する。とくに原子の集合が一つの対象として機能し得るかという問いに対し、認識側に現れる相と、認識を生じさせる原因としての働きが一致しない点を指摘する。ここで中心となるのは、外界の有無を断定する議論ではなく、所緣概念を現前の二側面から吟味し、対象条件を再設計する認識論である。護法注釈は、陳那以後の認識論的展開を理解する上で不可欠な基礎資料となる。

しかし、護法注釈研究は資料制約に直面してきた。サンスクリット原典は現存せず、主要資料は義浄漢訳 (*ĀPSH*) と、Vinītadeva に帰されるチベット語注釈 (*ĀPT*)。 *ĀPT* は、*ĀPSH* の読解を拘束する対照資料として用いるが、Vinītadeva への帰属自体を前提とせず、漢訳との対応関係から範囲と性格を記述する。したがって、*ĀPT* を護法の直接証拠として

優先するのではなく、ĀPSH に対する並行伝承として扱い、一致と差異の双方を根拠として提示する。研究史では、平易なチベット注釈が優先され、漢訳は用語の不統一や難解さを理由に一次資料としての活用が限定的であった。その結果、義浄訳そのものの翻訳方針や語彙運用を踏まえた本文読解、ならびに漢訳を基点とした伝承関係の検証が十分に行われてこなかった。

この偏りは、伝承の実態を曖昧にする懸念がある。ĀPT は漢訳の表現を強く踏襲しつつも、独自の敷衍や編集が加わっており、護法本来の論点と後代の要素が混在している可能性がある。また、ĀPSH に見られる訳語の揺れや特異な構文は、単なる誤訳ではなく義浄による翻訳実践の痕跡であり、原文構造を推定する手がかりを内包する。

実際、両資料を対照すると、ĀPT が漢訳の語句や定型表現を逐語的に踏襲している箇所が多数確認される一方、論敵導入の仕方や説明の厚み、結論提示の形式には改変も見られる。したがって、ĀPT をそのまま護法の自説として読むのではなく、ĀPSH を基層資料として据え、ĀPT を後代の継承と編集の形として位置づけ直す必要がある。

本研究は、ĀPSH と ĀPT の関係性を語句一致と議論構造から再評価し、義浄訳の翻訳的特質を捉え直すことで、ĀPSH を護法理解の一次資料として再定義する。本文の校合、英訳と注釈の提示、および ĀPT との精密比較を通じて護法解釈の特質を示し、陳那以後の唯識認識論の変遷を検証可能な形で明らかにすることを目的とする。

2. 方法論と理論枠組み

本研究の方法論は、比較テキスト分析、言語学的分析、およびテキスト再構成の三層から構築される。サンスクリット原典が欠落している制約下で、ĀPSH を護法思想理解の一次資料として再配置するため、四つの手順を軸とする。

第一に、校訂による漢訳本文の批判的整備である。刊本ごとの偏りを排するため、底本選定の理由と参照関係を明示し、異同の記録を校訂本文と脚注の双方に反映させる。特定の刊本への依存を避けるため、諸大蔵経諸版を網羅的に対照した。基礎テキストには宋代開宝蔵系統の『金蔵』（J）を採用し、同系統の高麗蔵（K）、別系統の普寧蔵（Pi）、資福蔵（S）、磧砂蔵（Q）、永樂北蔵（Y）、嘉興蔵（M）および近代の『大正新脩大蔵経』（T）を順次参照し、異同を記録した。この校合は字句の修正に留まらず、異体字や稀字の同定において書写上の変形や誤写の可能性を検討した。

第二に、護法思想の復元を教理要約ではなく、論敵提示（*pūrvapakṣa*）と反駁、結論確立（*siddhānta*）からなる論証運動の追跡として行う。所縁二条件（因性と似彼相）の提示から出発し、原子集合（和集、総聚）が所縁となり得ない理由、認識の主客関係がいかに説明されるかを論証単位で追う。たとえば、義浄が「極微」をどのように定義し、その集合体が認識を発生させる原因としての「功能」を欠くとする批判をいかに訳出したかを、論理

構造の単位で説明する。義浄訳が語順の倒置や省略によって接続を曖昧にする箇所では、論敵と自説を区別する標識語や接続表現に着目し、議論の骨格を確定する。

第三に、義浄訳の翻訳的特質を、護法の意図へ接近するための鍵として扱う。四字句志向、術語の不統一、音写と意識の混在を整理し、訳語の揺れが論点を曖昧化する箇所では、チベット注釈や玄奘訳系資料との比較を通じて読解を拘束する。訳語の揺れによって論点が曖昧化している箇所では、護法の認識論的枠組みに最も整合する読解を提案し、義浄の不自然な直訳の背後にある原文の論理構造を逆照射する。たとえば、*samūha* に対する「総聚」「総相」「集相」の混用、また「咀迦 (*tarka*)」「三佛栗底 (*saṃvṛti*)」等の音写語の挿入は、読解の障害であると同時に翻訳の痕跡として扱う。

第四に、テキスト再構成による伝承経路の可視化である。*ĀPS_h* の中に埋め込まれた *ĀP* 本文（偈と散文注）を抽出し、玄奘訳『観所縁縁論』と比較することで、護法が依拠した本文理解の特質を点検する。この再構成は原典を断定する試みではなく、東アジアにおける伝承形態と理解の手順を跡づける作業基盤として位置づける。

比較の基準としては、*ĀPS_h* だけでなく、陳那 *ĀP* の漢訳二本、すなわち真谛訳 (*ĀP_P*) と玄奘訳 (*ĀP_X*) も参照し、偈頌の語彙と論点配置を点検する。これにより、*ĀPS_h* における省略、言い換え、四字句化による増補がどこで生じるかを把握できる。あわせて後代の漢文注釈として明昱注 (*ĀPS_h_M*) や智旭注 (*ĀPS_h_{Zh}*) を参照し、用語理解と読解伝統の分岐を確認する。これらは護法解釈の直接証拠ではないが、漢訳本文の読解可能性を点検する補助線となる。

言語学的分析では、義浄訳に頻出する助辞、指示語、否定表現、因果標識などを整理し、論敵提示と反駁、結論確立の境界がどの語で示されるかを確定する。推理に関わる語彙や存在論、認識論に関わる語彙の用法も検討し、訳語の揺れが議論焦点に与える影響を点検する。たとえば、チベット語の *'dus pa* に対応する語の訳し分けが、集合と相の区別に与える影響は、その代表例として扱われる。

本文再構成では、注釈中の偈頌引用と散文注の引用を抽出し、重複を整理しつつ配列を整える。*ĀP_X* との対照を通じ、護法が前提とした本文理解の差異、義浄訳が保持する語彙の特徴を明確化する。*ĀPS_h* が第七偈以降を欠く制約は残るが、現存部分については、校訂、英訳注釈、比較、言語分析、再構成を連動させることで、読解の根拠が相互に照合できる形となる。

校訂の脚注では諸本の参照順を固定し、読者が異同を追跡できる形で提示する。近年の大蔵経のデジタル化により参照可能な底本が拡大している点も踏まえ、従来の特定刊本中心の読解が抱えていた制約を補う。英訳では、原文の語順や省略が議論理解を妨げる場合に、論証構造が保持される範囲で補いを施し、注釈で補いの根拠を明示する。訳語の選択は、玄

奘訳の定訳との関係、義浄訳の語彙の癖、チベット注釈の並行表現を踏まえて行い、全体の用語運用が一貫するよう拘束する。

翻訳提示にあたっては、参照可能性を確保するため章ごとの注番号を採用し、引用箇所が追跡できる形で整理する。漢文引用は大正本の体裁を踏まえつつ、読解に必要な範囲で現代的な句読点を付す一方、原文の語句は保持する。比較作業では、教理的一致ではなく、語句、定型句、議論の区切りという単位を重視し、論敵導入の標識語や結論提示の定型表現の一致から依存関係を記述する。第四章ではこの関係を、逐語的対応、言い換えによる敷衍、引用の明確化、議論順序の再編、批判的補足といった類型に分け、単純な同一視を避ける。

以上の手順により、校訂本文を基盤に、翻訳注釈、比較、言語分析、再構成を相互に拘束させ、漢訳を一次資料として運用する理論枠組みを構成する。

3. 章ごとの要約

第一章では、 $\bar{A}PSH$ と $\bar{A}PT$ がともに護法注釈を伝えるという前提自体を点検し、両者の依存関係を検証する必要性を示す。両資料の関係を検証する際には、同一論点での語句の一致だけでなく、議論の順序、論敵の類型提示の方式も比較し、単なる内容一致では説明できない依存の痕跡を抽出する。義浄訳は玄奘訳のような流麗な意識ではなく、サンスクリット語の構造を漢文の中に保存しようとする逐語的直訳の性格が強いこと、そして四字句志向や音写語の選択が論理理解に与える影響を整理する。

第二章では、校訂そのものが解釈の前提であることを明示し、誤写や不適切な句読点が論証構造の把握を妨げる具体例を示す。とくに「和集」と「総聚」など、対象条件の議論に直結する語の異同を整理し、論敵と自説を区別する標識語を手がかりに本文の節目を確定する。

第三章では、整備された本文に基づいて英訳と注釈を提示し、所縁二条件が外部対象否定と内なる相肯定へ至る論証過程を、推理形式を含めて再構成する。義浄訳の語順や省略による難点は、注釈において論理単位ごとに処理し、訳文上の癖と護法の論点を峻別する。

第四章では、 $\bar{A}PSH$ と $\bar{A}PT$ の比較により、逐語的踏襲と独自の敷衍を分けて記述し、資料層の混交を避ける。さらに義浄訳の訳語揺れを組織的に整理し、翻訳の痕跡として原文構造推定へ接続する。最後に、 $\bar{A}PSH$ 内引用から $\bar{A}P$ 本文を抽出し、玄奘訳との対照を可能にする。

4. 研究の成果

第一の主要な成果は、護法注釈の伝承において、 $\bar{A}PT$ が $\bar{A}PSH$ の語句や定型句、議論順序を広範に踏襲している事実を、具体的な一致例に基づき示した点にある。従来は体系性と

平易さを理由にチベット注釈が優先されがちであったが、この比較は、漢訳を補助資料から一次資料へ再配置するための資料的根拠を与える。これにより、どの層で護法の議論が保持され、どの層で後代の編集的要素が加わったかを区別するための前提が確立される。同時に、*ĀPT* に見られる敷衍や編集、補足を類型化することで、護法本来の論点と後代の要素を区別する前提が整えられる。敷衍については、説明の増補、語句の言い換え、論証順序の再編、引用の明示化、批判的補足といった形を区別し、*ĀPSh* との対応関係を一点ずつ確認する。

第二の成果は、*ĀPSh* に見られる用語不統一を、読解の障害として処理するのではなく、翻訳実践の痕跡として体系的に整理した点にある。*samūha* に対する複数訳語の混用や、単一訳語が複数概念を覆う例、音写語と意識の併用を精査し、どの揺れが認識と対象の区別を曖昧にし得るかを示した。その上で、比較資料を用いて護法の枠組みに整合する読みを提示し、直訳的表現の背後にある原文構造を逆照射する。

第三の成果は、*ĀPSh* 内部に引用される *ĀP* 本文を抽出し、玄奘訳本文との対照を可能にした点である。原典不存の状況下で、この再構成はインド原文の断定ではなく、護法注釈を介した本文理解と語彙運用を検証する作業基盤となる。これにより、護法注釈が前提とする本文理解が東アジアでどのように受け取られたかを、本文と注釈の対応という形で追跡できる。あわせてチベット側資料の題名 (*Ālambanaparīkṣāṭīkā*) に関する再検討など、資料論の細部を整理し、呼称が解釈枠組みに与える影響も明確化した。

5. 結論と今後の展望

本研究は、護法著『観所縁論釈』を中心に、*ĀPSh* と *ĀPT* を組織的に対照し、六世紀インドの唯識認識論が二つの伝承の中でいかに保持され、また変容し得るかを文献学的に示した。とくに、護法理解の基盤とされてきたチベット注釈が、漢訳の語句や議論構造を頻繁に採用している事実を示したことで、護法研究における資料の序列を再検討し、漢訳を一次資料として運用する学術的根拠を提示した。これにより、護法研究の資料的基盤を刷新し、議論の検証可能性を高める。

また、義浄訳に見られる用語の不統一や四字句志向を、単なる欠点ではなく翻訳の痕跡として体系化し、護法の論理復元に資する手順を示した。訳語の揺れや音写語の挿入を、比較と注釈によって論証単位へ回収することで、失われた原文構造を推定するための読解可能性が拡張される。漢訳注釈に基づく本文再構成は玄奘訳との対照を可能にし、東アジアにおける陳那認識論の受容過程を、より検証可能な資料基盤の上に置く。

第七偈以降の欠落という制約は残るが、現存部分については、校訂、英訳注釈、比較、言語分析、再構成を連動させることで、読解根拠が相互に照合できる形となった。今後は、本研究で確立した統合的手順を他の義浄訳資料や関連唯識文献へ拡張し、翻訳資料を一次資

料として扱う実践的モデルとして展開することが課題となる。本研究の枠組みは、翻訳資料を一次資料として扱うための実践的な学術モデルとなり得る。

さらに、所縁を外界の実体ではなく、認識を生起させる因（能生性）と識に現れる相（似彼相）の二側面から捉える護法の議論は、認識の成立条件をめぐる概念整理に示唆を与える。以上により、漢訳の難解さを欠点として回避するのではなく、証拠として運用し、資料の序列、翻訳の痕跡、再構成を連動させて護法注釈を扱う道筋を提示する。

特に、資料批判と翻訳分析を結び付ける点は、唯識認識論研究における資料利用の方法を再考させる。漢訳とチベット注釈の関係を精査することは、チベット側資料の位置づけを明確にし、比較研究の前提を整える。以上の枠組みにより、失われた原典に代わる検証手順が具体化される。